

ゆるふーVI

まなキキ・オンライン講読会

『主体の解釈学(2)』第14講

一九八二年三月二十四日②「生の技術, 自己の試練, 哲学の修練」他

2026年2月3日

Mせんせい

■ 死の省察とその特色

- ・ 災厄の予期の極限
- ・ プラトンやピュタゴラス派でもみられるが、ヘレニズムおよびローマ期の自己実践の内部で、調子や意味や形式の屈折があった
 - 災厄の想定や予期とまったく同型的なもの
 - 死はたんに可能な出来事ではなく、必然的な出来事
 - 人間にとって絶対的な重みをもつ出来事
 - 死はいついかなるときも、またどのような瞬間においても起こりうるもの
 - 卓越した意味における不幸としての出来事
 - 死の訓練の特別な点
- ・ 自己自身の意識化のある種の形式の可能性が現れる点
 - 私たちの生において死を現在化すること
 - 一日の最後の瞬間が人生の最後の瞬間であるかのようにして、自分の一日を組織し、経験すること。

最高の人格とは、日々をおのが終焉の日のごとく暮らすことだ。(アウレリウス)

■ 死の省察は、自分自身を知覚することを可能にする (p317, 12-)

1. 現在に対する俯瞰的で瞬間的な視点

- ・ 生の持続や活動の流れや表象の流れの中に、思考による切り取りをおこなうことを可能にする
 - いま生きつつある瞬間や一日が、最後のおものであると思い描くことによって、いわばそれをスナップショットのようにして不動化する
 - 私がしていることはどのような価値を持つのか、私の志向や活動はどのような価値を持つのかということ、私がそれを最後のものとして考える過程において開示される

病気や死はわれわれが一体なにをしようとしていようとわれわれを襲うべきものなのだ。それは耕している農夫や航海している船漕ぎをも襲うのだ。君は何をしているときに襲われたいのか。というのは一体君は何をしようとして襲われなければならないからである。もし君がそれよりもっとすぐれたことをしている時に死に襲われることができるならば、それをするがいい。(エピクテトス)

- すべての行為を最後の行為としておこなうなら、それは「軽率さ」や「説得的な理法からの離反」や「偽善」などから、「利己心や運命への不満」からも解放されるだろう(アウレリウス)

- 時間の流れに対する現在の視点、切り取りであり、おこないつつある行為の諸表象の把握

2. 生全体に対する回顧の視線

- ・ 死についての思考は、人生についての回顧や、人生に価値を与えてくれるような想起を可能にする
:未来についての思考ではない
- 死の訓練や思考はひとつの手段
 1. 現在の価値を把握させてくれる切り取りとしての視線を自分の人生に注ぐ:現在についての判断
 2. 想起によって人生を全体化してそれをあるがままの姿で現させ、人生を輪のように閉じるような視線を注ぐ:過去の価値評価

■ 良心の吟味について (p538, 16-)

- ・ 良心の吟味は、ピユタゴラス派の古い規則
 - 本来の意味は、「一日のうちにお前がしたことすべてを吟味することによって、やすらかな眠りを準備せよ」というもの
:良心の吟味の主要な機能は、睡眠の前に思考を浄化させてくれること
 - ・ 自分がしたことを判断するためになされるのではない
 - ・ 何かを悔恨として呼び起こすためのものでもない
 - 良心の吟味は睡眠の純粹さのために魂を浄化しなければならない
 - ・ 夢はつねに魂の真理を開示するものだという考え方に結びつく
 - ・ 夢とは、魂の純粹さの試練
- ・ ストア派における「良心の吟味」の変化
 - ストア派において、良心の吟味は〈朝の吟味〉と〈夕べの吟味〉という二形式で行われる

朝の吟味	夕べの吟味
<ul style="list-style-type: none"> ・ 自己の実践のなかで唯一、本当の意味で未来に向けられた吟味 <ul style="list-style-type: none"> - いわば近い未来、直接の未来に向けられる - 一日のうちにこれからすること、約束のあること、面会の予定、立ち向かわなければならない課題 	<ul style="list-style-type: none"> セネカ『怒りについて』の例を中心に <ul style="list-style-type: none"> ・ まわりを沈黙が支配し、すべてが静かになり、眠りに就こうとするときに、その一日にしたことを振り返る ・ <u>自分自身にたいしていかなる寛容をもしめしてはならない</u> <ul style="list-style-type: none"> - 自分自身を自分自身の法廷に召喚し、そこで自分は裁判官であると同時に被告でもある

- セネカの「夕べの吟味」は、キリスト教の告解や告白の実践に近いもののようにみえる
 - しかし、セネカの定義する吟味は、改悛の法廷や中世キリスト教の良心の吟味と非常に大きな相違を示す
- ① セネカが一日から取り出すおこないや過失(=罪)とは、相対的な過失である
 - セネカにとっての「過失」は、良心の指導者としての過失であり、技術的な過失として理解すべきもの

(道具をうまくつかいこなせなかった、使っている道具をしっかり持てなかった、手段がよくなかった)

- 手段と目的が一致していないという理由で、指摘されるようなもの
- 朝の吟味が、なすべき課題、立てるべき目標や目的、使うべき手段などを定めるものであるのに対し、夕べの吟味は、朝の吟味に応じてその総括をするもの

② 法的というよりは行政的

- セネカは、自分は裁判官であり、みずからの法廷に身を置き、裁判官として座ったり、被告として出席したりするのだと言うものの…
- しかし、自分が実践している吟味をかたちづくるさまざまな作業を語るときには、彼(セネカ)は法的な用語は使わず、行政的な用語を使う
 - ・ Excutire: 振動させる: 帳簿や会計を再検討して、すべてのミスをなくすこと
 - ・ Scrutari: 軍隊や野営地や船舶を査察すること
 - ・ Speculator: 査察する、といった意味
 - ・ Remetiri: 査察者として価値を再秤量すること

③ 自分自身を批判しない

私は何も逃さない、したことはすべて覚えているし、寛容さも示さないが、私は自分を罰することはしない。たんに自分にこう言うだけだ。これからはお前のしたことを繰り返してはならない、と。それはなぜか。友人に声をかけて批判するときを立てるべき目的は、友人を傷つけることではなく、進歩させることだ。だれかと議論するのも、それは真理を相手に伝えるためだ。だから、もしまた同じような状況に身を置いたならば、こうしたさまざまな目的を思い出し、これからは私のおこないがそれに適合するようにしなければならない (下線は M せん)

● セネカにとっての「夕べの吟味」

- ・ 行為の基本的な規則を呼び起こすための試練: 記憶の訓練
 - 念頭に置いておくべき目的、この目的に達するために使うべき手段、すぐに立てるべき直接の目標などを思い起こす
 - その一日に起きたことだけでなく、つねに念頭に置くべき規則を思い起こす訓練
 - ⇒ 規則を呼び起こし、自分のしたことを記憶していることによって、思い出した規則とおこなった行為の不一致を評価する
- ・ 他方で、こうした呼び起こしや記憶によって、いったい自分がどこまで進んでいるのかを評価するという意味でも一種の訓練となっている
 - 自分は、真理の倫理的主体としてどこまでいっているのか、どの程度まで、どこまで、どの点まで、自分は行為の主体でもあり、同時に真理の主体でもあるような同一の主体としてあることができるのか
 - 真理の倫理的主体としての私自身を錬磨することを、私はどこまで進めているのか
- 良心の吟味は、たえざるバロメーター: 真理の倫理的主体の構成においてその程度を毎晩秤量しなおす作業である
 - エピクテトスの文章でも同様の記述

- 「哲学すること、それは心構えをすることだ」
- ・ 生の全体を試練とみなすような情態に身を置くこと。
- ・ 「修練的なもの」とは、私たちの手許にある訓練の総体であり、その意味は、生に対して恒常的に準備をさせてくれること
 - 生そのものが試練となる

■ 哲学者の「修練的なもの」としての自己への配慮 (p543, 119-)

- ・ 生そのものが試練となったことで、ギリシア人がさまざまな形で生の技法に求めていたものが、自己を気づかわなくてはならないという原則に完全に占められることになる
 - 一連の不意の出来事に対する準備を固めること
 - いくつかの訓練を実践し、出来事を不可避で必然的なものとして現在化し、それが持ってしまいかねない創造的な実在性を剥ぎ取り、その存在を最小限に切り詰めようとした
- ⇒ キリスト教的修練は、自分自身の放棄という究極の地点にまで導いてくれるために必要な放棄がどのようなものなのかをその領域で定めることを主たる機能とする
- ⇒ 哲学者の修練は、自己自身の育成のための訓練だけではなく、真実の認識の主体を正しい行為の主体として構成するためのひとつのやり方として理解すべき
 - ひとつは自分自身の相関物としてひとつの世界の中に位置づけられ、それを与えられる
 - この世界は、試練として知覚され、認知され、実践されるような世界となる

■ 自己への配慮の時間軸上の展開 (p544, 116-)

- ・ ヘレニズム期、帝政期の古代思想において、現実的なものは自己の経験の場、自己の試練の機会として考えられるようになった
- 西欧思想に固有な客観性の形式の理解のために
 - 世界がテクネーの相関物になったことを考える必要性
 - 世界は、ある時を境に、思考の対象であることをやめ、テクネーすなわちさまざまな技術を特徴づけるようないくつかの道具や目標によって認識され、評価され、支配されるものになった
 - 西欧思想に固有な客観性の形式が構成される
- 西欧思想に固有な主観性の形式とは
 - 客観性が構成されるのと逆向きの運動によって構成された
 - ビオス(生)がテクネーの相関物であるのをやめたとき、西欧思想に固有な主観性の形式が構成された
 - ビオスはテクネーの相関物であることをやめ、自己の試練の形式となった

さまざまな形で生の技法に求めていたものが、生そのものが試練となることで、世界がテクネーの相関物になった(真実との結合を目指す修練の状況を秤量する?)ということ、そしてキリスト教下での変遷によって主観性の形式が生まれた、的な????:よくわかりませんでした…(;▽;)

- ビオス／生とは、私たちの生存を通して直接に世界が現れてくる方法のこと

ビオスが試練であるという2通りの意味

① 経験という意味における試練

- 世界は、それを通して私たちが私たち自身の経験をする場
- 私たちが自己を認識し、自己を発見し、自分自身に対して自己を開示するような場として認知される

② 世界／ビオスはひとつの訓練でもある

- 世界を出発点として、世界を通して、世界があるにもかかわらず、世界のおかげで、自分自身を形成し、変容させ、目的や救済に向けて歩み、自分自身の完成をめざす

世界はビオスを通して経験となり、それを通して私たちは自分自身を知る

それは訓練ともなり、それを通して私たちは自己を変容させたり救済したりする

- ビオスはテクネーの対象、理性的で合理的な技法の対象でなければならないと考えていた古代ギリシアとの関係において重大な変化であり、重大な変異

プロセス1. 世界は思考されるのをやめて、テクネーによって認識される

プロセス2. ビオスがテクネーの対象であることをやめて、試練の、経験の、訓練の相関物となる

⇒ 西欧において哲学に対して提起される問題がどのようなものであったかが基礎づけられた

:言説や伝統としての哲学に対する西欧思想の挑戦

- テクネーを通して世界を対象として自分に与えるような認識主体があり、またこの同じ世界を試練の場というまったく異なった形式で自分に与えるような自己経験の主体があるということとはどういうことなのか

→ ヘーゲルの『精神現象学』がこの哲学の頂点にある

感想

確かに、今日が人生最後の一日だと思って生きることは、その自分が死ぬ瞬間が自分にとってどのようなものであるか、あるべきかを考えさせることになる。同時に自分の人生についても結局どんなものであったのかを意識させるようなことになるのかもしれない、と思う。

古代ギリシアとヘレニズム・帝政期における自己への配慮は異なるものになったターニングポイントは、自己への配慮が生涯をかけて求められることになったということ:(古代が神の相似物たる自己の完成を目指した?のに対して)そもそも神のように理性的には振る舞えないが、真理を認識しその真理を行為する主体として生きることができるよう、修練が目指された。死をも含む自分自身のありようを揺るがず事態ひとつひとつに、しっかりと対峙することができるように、そのために学び備えさせ、実在性を縮減させて“ちゃんと”振る舞えるような努力がなされた、ということか。朝の吟味と夕べの吟味は、リアリスティックに感傷的にならず淡々と出来事を評価し、自分の言動を微調整させていくような試みのようにもよめた。

世界は、認識の対象というよりかは、自分自身が修練を通じて得た変容の程度や効果を世界を通じて測るために存在するようなものでしかなかった、ということ。それがどのように意味合いの異なるものになったのか、答えが得られたような得られていないような。ただ、アクションリサーチなど、現場とアクターの相互の変容を分析するような方法と、どこかで通じるとみていいのか、どうなのか…ごによごによ…